

葛籠尾崎は、琵琶湖の北端部にある、北湖に突き出した岬状の地形です。山がちで険しい地形が続き、急な斜面が深い湖底まで続いています。現在は西側が伊香郡西浅井町、東側が同郡高月町と東浅井郡湖北町の飛び地となっていますが、近世まではすべて「浅井郡」の範囲でした。

大正13(1924)年末、湖水を挟んで葛籠尾崎の東方に位置する尾上(現湖北町)の漁師が鮎漁をしていたところ、その底引き網に数個の土器が引っ掛かりました。その後、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器などの土器や石器などの遺物が次々と引き揚げられ、湖底遺跡の存在が明らかになったのです。

このような深水域にある遺跡は世界的にも例がないため、に広く知られることとなり、また、琵琶湖の湖底遺跡研究のきっかけにもなりました。その研究を特に進められたのが、尾上出身の故小江慶雄博

士(元京都教育大学学長)です。小江博士は滋賀県を主な研究フィールドとし、長年にわたり水中考古学を積極的に研究されました。

昭和34(1959)年には音響探査などによる「びわ湖湖底総合科学調査」が行われ、葛籠尾崎と尾上の間には深さ70mを測るV字形の深い谷があり、遺物の分布はその谷底まで広がることわかりました。昭和48(1973)年には、滋賀県教育委員会により遺物の出土状況などを確認する潜水調査が行われました。

湖底での遺物は土中に埋没せずに露出していました。これは周囲に河川がなく土砂が堆積しなかったため、沈んだ当時のままの状態が残ったためと考えられます。この潜水調査の時の様子は、具立琵琶

謎の葛籠尾崎湖底遺跡



葛籠尾崎湖底遺跡から引き揚げられた遺物
—湖北町の尾上公民館

湖博物館(草津市下物町)で見学できます。

遺物の引き揚げ地点やこれらの調査から、遺跡の範囲は葛籠尾崎の先端から東沖約10〜700m、葛籠尾崎の湖岸に沿って北へ数kmと広大であることがわかりました。

遺物は、現在までに約150点が見つかっています。土器の年代は縄文時代早期から平安時代後期までの約8000

年と長期にわたり、完形品が多いのが特徴です。また湖水に含まれる鉄分(湖生鉄)が厚く付着したものも多く、これは長い間同じ位置にあったことを裏付けています。

遺跡の成因については、小江博士の研究以降、いくつもの説が提示され、湖上住居説や湖岸遺跡からの遺物流出説、地形変動による遺跡の沈没、沈没船の積み荷説などがあります。また、葛籠尾崎の北東にある、北陸方面との玄関口となる塩津港へ往来する船が、安全を祈願して土器を奉納したのではないかと、とする説もあります。しかし、いずれも推定の域を出ていません。

見つけた土器を観察しますと、縄文土器や弥生土器には煮炊きに用いられたことを示す煤が付着するものもありますが、古墳時代以降の土器にはそのような使用した痕跡が見当たりません。出土する土器から時代により遺跡の成因が変化している可能性も考えられます。

葛籠尾崎湖底遺跡から引き揚げられた出土品のほとんどは、小江博士の尽力により散逸を免れ、湖北町指定文化財として現在も尾上公民館の資料室で小江博士の業績とともに大切に収蔵、展示されています。見学には事前に予約が必要です(入場料300円)。問い合わせは湖北町教育委員会(☎0749・78・8309)まで。

湖上住居、地形変動：積み荷説も

(滋賀県文化財保護協会 小島孝修)